

9. 河川空間の現状

9.1 河川敷等の利用の現状

信濃川水系における高水敷の占用状況は、全体の88%を農地が占めており、上流部では果樹園として、中・下流部では田畑として多く利用されている。公園、緑地、運動場などの利用は9%と低くなっている。

利用形態は半数以上が散策等の利用であり、次いでスポーツが多い。年間総利用者数は約690万人で、北陸管内の河川の中では群を抜いて多く、全国で見ても利根川、淀川、荒川、多摩川に続く5位となっている。

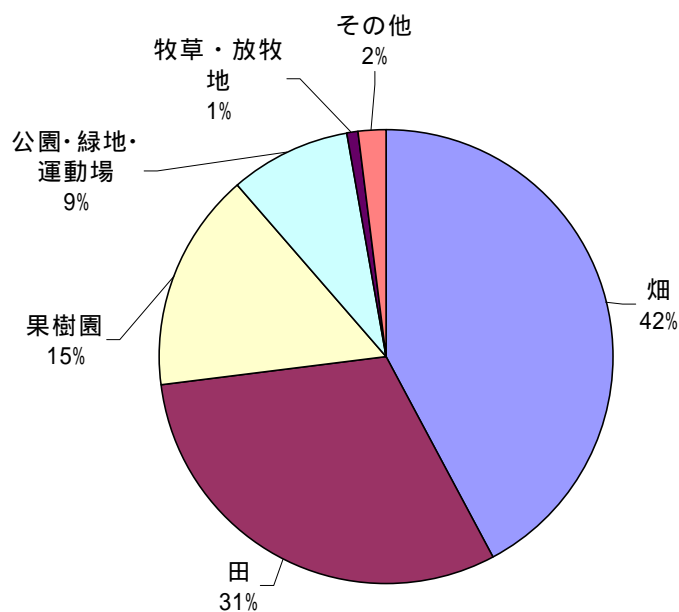


図 9-1 信濃川水系の河川敷占用状況

表 9-1 信濃川水系の河川利用状況

利用形態	利用者数(人)
スポーツ	2,809,812
釣り	222,815
水遊び	131,914
散策・その他	3,724,639
合計	6,889,180

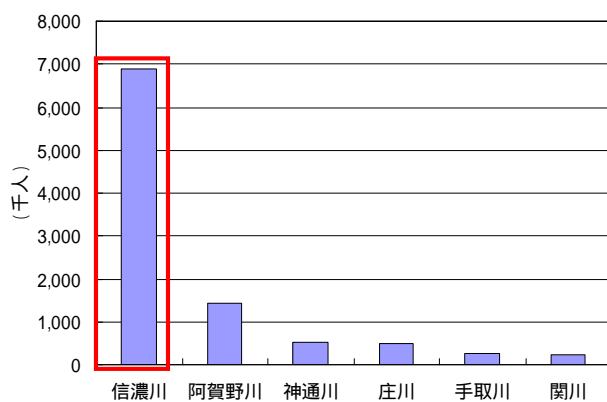


図 9-2 北陸管内の河川の利用者数

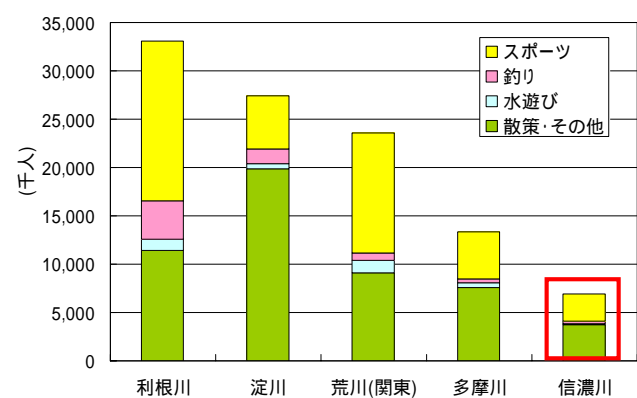


図 9-3 全国水系別河川利用状況

出典：平成 15 年度河川水辺の国勢調査(河川空間利用実態調査)

(1)上流部（千曲川）

上流部（千曲川）ではスポーツ等の健康増進の場や水辺の^{がっこう}楽校等を活用した環境学習の場としての利用が盛んであり、耕作地、果樹園としても広く利用されている。水面の利用としては、カヌー、ラフティング等に利用されている。また、ウグイを取る「つけ^{ばりよう}場漁」は千曲川の風物詩ともなっている。



写真 9-1 長野マラソン大会



写真 9-2 千曲市のモモ畑



写真 9-3 カヌー



写真 9-4 つけ場漁

(2)犀川

沿川の安曇野市は豊富な湧水を利用したわさび田が多い。また、ハクチョウなどの渡り鳥の飛来地があり、野鳥観察が盛んである。



写真 9-5 わさび田



写真 9-6 犀川の白鳥飛来地

(3)中流部

中流部では河川敷の水田や畑地等の農地利用が盛んであり、長岡市街地付近でグラウンド、公園利用等が図られるとともに、長岡市街地の堤防は緩傾斜化され、毎年8月の「長岡大花火」の観覧席など多くの人に利用される。

また、水辺を自然体験の場として活動する「水辺の楽校プロジェクト」なども展開されており、平成13年に水辺の楽校「つまりっこ広場」が開設された。



写真 9-7 高水敷の水田としての利用
(蔵王橋付近)



写真 9-8 緩傾斜化された堤防
(長岡大花火大会)



写真 9-9 つまりっこ広場



写真 9-10 環境学習活動(水質調査)

(4)魚野川

魚野川では瀬と淵が連続した河川形態によりアユの良好な生息環境となっており、伝統的な「ヤナ漁」がみられるとともに遊魚客が多数訪れる。また、カヌーやラフティングにも利用されている。



写真 9-11 ヤナ場



写真 9-12 アユ釣り

(5)下流部

下流部では、「やすらぎ堤」と呼ばれる 5 割勾配の緩傾斜堤防が全国で初めて整備され、周辺の公園整備と相まって、都市部の貴重な水辺空間として人々の憩いの場にご利用されている。河川敷は、都市部を除き、田畑、果樹等の農地として大部分が利用されている。現在は、観光舟運や水上スポーツ等の水面利用が盛んであり、また、プレジャーボート等が不法係留され秩序ある水面利用が求められている。



写真 9-13 やすらぎ堤



写真 9-14 果樹園



写真 9-15 水上バス

9.2 内水面漁業

信濃川は、古来より漁業が営まれており、その清冽な水が流域に恵みを与えてきた。現在も漁業が盛んであり、アユやウグイをはじめ、コイ、フナ、カジカ、ウナギなどを捕獲する魚が営まれている。

上流部では、ウグイが産卵の時期に川をのぼる習性を利用して、人工の産卵床をつくり、産卵に来たウグイを一網打尽にする「つけ場漁^{はりょう}」が行われている。つけ場漁は、江戸時代から続くこの地方独特の漁法であり、春の風物詩となっている。

魚野川では、伝統的な「ヤナ漁」が行われており、春はウグイやヤマメ、夏はアユ、秋はサケ、ウナギなど四季を通じて様々な魚が取れる。川口町のヤナ場は明治初期に設置された日本で最も古いヤナ場で、今も日本一の規模を誇っている。また、アユ釣りが盛んで、県内外から多くの遊魚客が訪れている。

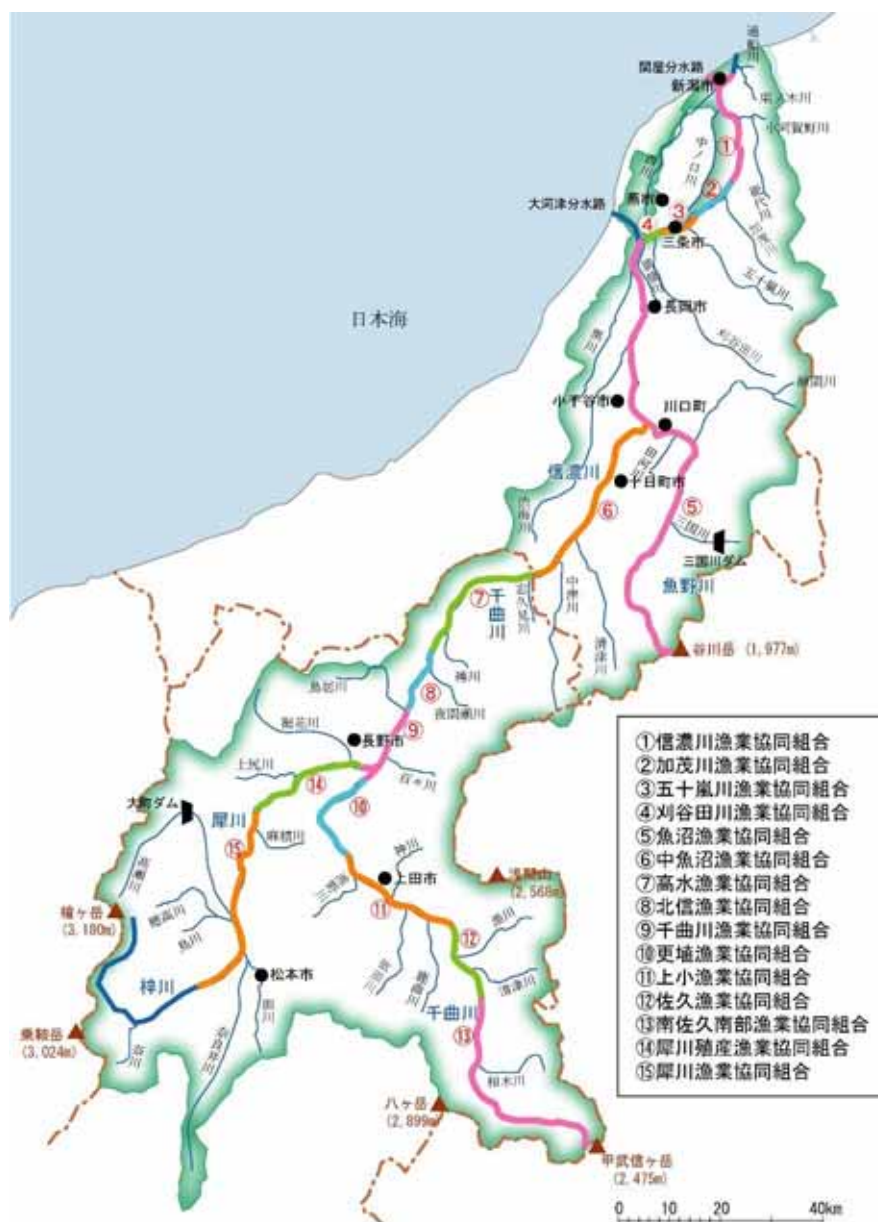


図 9-4 漁業権の設定状況